

研究集会・講座等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
国際シンポジウム（G01）	美術部	81
国際文化財保存修復研究会の実施（F09）	国際文化財保存修復 協力センター	82
美術部オープンレクチャー（B13）	美術部	83
芸能部研究集会・講座（C05）	芸能部	84
第32回文化財保存修復研究協議会の開催（E10）	修復技術部	86
近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（*E01）	修復技術部	86
在外日本古美術品調査報告会（*E05）	修復技術部	87
総合研究会（A）	協力調整官 情報調整室	88
美術部研究会（B）	美術部	89
保存科学部研究会（D）	保存科学部	89
各国の文化財保護制度に関する研究会（F）	国際文化財保存修復 協力センター	90
アフガニスタン等文化遺産保存修復専門家会議（F）	国際文化財保存修復 協力センター	92

- *注 ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究会は、近代の文化遺産の保存修復に関する研究（E01）の一環として実施した。
- ・在外日本古美術品調査報告会は、在外日本古美術品保存修復協力事業（E05）の中で包括的に実施した。

第26回文化財の保存に関する国際研究集会
「うごくモノ 時間・空間・コンテキスト」(G03-02-1/1)

第26回国際研究集会は美術部の担当で、東京国立博物館との共催により下記のように行われた。

【開催趣旨】美術の研究は、作品の価値から離れては成り立たない。このシンポジウムでは、美術品の価値形成のメカニズムを考える切り口として「移動」という視点を提言した。ここでの移動は、空間的な移動のみではなく、移動しないのにモノの在りようが変わる「時間的移動」や破壊による「消滅」なども移動の一形態と考える。この視点からは、モノは時間、空間、そしてその置かれたコンテキストを移動する生き物とのアナロジーで捉えられる。このような「移動」は、モノの価値形成と密接に関わっている。売買・寄贈・略奪など様々な移動の過程で、モノの価値は保存され、変質し、また新たな価値を上塗りされ、様々な価値の歴史が堆積していく。モノが空間軸・時間軸・コンテキスト軸からなる三次元空間を移動していく様相を歴史的に追うことによって、美術品の価値形成のダイナミズムを分析し、その結果としてある「現在」を浮彫りにすることを試み、建築や考古遺物、また固定したかたちをもたない芸能などを含めた幅広い対象について議論する。

期 日：2002（平成14）年12月4日（水）～6日（金） 場 所：東京国立博物館平成館大講堂

プログラム：

12月4日 基調講演 鈴木廣之（美術部）「うごくモノ 時間・空間・コンテキスト」

【第1セッション モノの年輪】 セッション討議 司会：山梨絵美子（美術部）

テリ・S・ミルハプト（メトロポリタン美術館研究員）

<辻が花> 裂四百年の伝来 世俗の衣裳から博物館の収蔵品へ

内田 好昭（京都市埋蔵文化財研究所） 神代石の収集

松原 茂（東京国立博物館） 題跋の追加とその価値

裴 炯逸（カリフォルニア大学サンタバーバラ校）

植民地朝鮮に<日本の古代>を収集する 東京人類学会と比較文化的枠組み

石 守謙（國立故宮博物院） 皇帝コレクションから国宝へ 20世紀前半における中国美術と故宮博物院

12月5日【第二セッション モノの旅行記】 セッション討議 司会：鈴木廣之（美術部）

林 道郎（武蔵大学） 《ゲルニカ》のオデュッセイア 20世紀のアイコン

グレゴリー・P・レヴィン（カリフォルニア大学バークレー校）ボストンにおける羅漢 大徳寺五百羅漢図の旅

洪 再新（ピュージェット・サウンド大学）ストックホルムから東京へ 20世紀初頭、中国古画の国際市場におけるE.A.スツラヘルネクのふたつのコレクション

山崎 剛（文化庁） 輸出漆器における異国性の変容

井手誠之輔（情報調整室） 作品のアイデンティティと画家の実存 西金居士筆、張思恭筆とされる仏画の場合

宮田 繁幸（芸能部） 芸能における「移動」の意味 民俗芸能の場合を中心に

田中 淳（美術部） 都鄙の振幅 青木繁の場合

12月6日【第三セッション モノと人の力学】 セッション討議 司会：島尾 新（多摩美術大学）

寧 強（ミシガン大学） 敦煌大仏の生命 - コンテキストの変化と機能の変化

中井 淳史（日本学術振興会特別研究員<京都大学>）

憧憬のなかの京都：うごく<モノ情報>と価値形成 日本中世の土師器における

アマンダ・M・スティンチカム（インディペンデント・スカラー）

沖縄県における縦緋の木綿細帯 その用途・社会階級・意味が変化してゆく八重山ミンサー帯のうつりかわり

佐々木利和（東京国立博物館）

とこしえに地上から消えた千島アイヌとその文化 日本人が自ら葬り去った異文化

中谷 礼仁（大阪市立大学）

セヴェラルネス（事物の多様性を可能にする転用過程のメカニズム） 歴史的住居の転用研究から

富井 玲子（インディペンデント・スカラー） 「日常性への下降」から「芸術性への上昇」へ 赤瀬川原平・他 《模型千円札事件》における作品空間の生成と移動

国際文化財保存修復研究会 (F09-02-2/5)

文化財は、個々の地域の文化と伝統を反映し、地域の人々の思いに支えられて現代に伝えられたものであり、その内容、材質、おかれている物理的な環境の違いとともに、文化財自体に対する人びとの接し方、保存の考え方にも違いがある。国際協力による文化財保存とは、パートナーとなる外国、地域の状況を理解し、同時に私たち自身の文化財保存についての考え方や方法を理解してもらいながら、互いの協力によって推進されるべきものである。日本の専門家による海外の文化財保存事業への参加がますます増えている現在、東京文化財研究所は、みずから国際的な文化財保存活動に参加するとともに、専門家相互のネットワークを作り、情報交換の場を提供していくことを大きな使命と考えている。このような目的から、毎年2回、国際文化財保存修復研究会を開催し、専門家による報告を通して、具体的な海外での保存事業における技術的な問題から運営面、財政面の問題、さらには文化財をとりまく社会の問題、文化そのものの問題など、多岐にわたる研究を行っている。

平成14年度に開催した2回の研究会は、国際文化財保存修復協力センターが主催する研究会としては初めて、無形の文化財の保存について焦点をあてることを予定し、第12回においては日本、東アジア、そしてユネスコにおける無形の文化財保護の取り組みについて、その国際比較を行った。第13回では、前年度において試みた文化財保護と「民族」「宗教」「政治」「経済」等との関わりについての議論を無形の文化財の場合で考えようとしていたが、アフガニスタンの文化財保護支援のための活動が急になり、テーマを変えて実施した。

第12回国際文化財保存修復研究会

テーマ：“無形の文化財”の保護に関する国際比較

内容：“無形の文化財”の保護に関して、3人の専門家にお話し、日本及びアジア各国の現状、そして最近のユネスコの活動についてお話しいただいた。世界の状況を認識することによって、国際協力による保存と支援の活動についての可能性を探るばかりでなく、この国際比較を通して、かえって日本の現状に対する客観的な視点も生まれるのではないかと期待して今回の内容を企画した。

日時：平成14年9月27日(金) 10:00～17:00、会場：東京文化財研究所セミナー室、出席者数：66人

講演：

- 「日本における“無形の文化財”保護の現状と方向性」 東京文化財研究所 宮田繁幸(民俗芸能)
- 「アジア各国における“無形の文化財”保存の動向」 東京文化財研究所名誉研究員 星野 紘(民俗芸能)
- 「ユネスコにおける“無形の文化財”保存についての取り組み」 ユネスコ 佐藤直子(無形文化財専門官)

第13回国際文化財保存修復研究会

テーマ：アフガニスタンの文化遺産の復興をめざして

内容：アフガニスタンの文化財の復興について我々に何ができるかを考える研究会にしたい、という目的で開催された。文化庁と東京文化財研究所がアフガニスタンの文化財保存修復協力事業に関する協議のために本国から招いた2人の専門家に、アフガニスタンの文化財の現状と、そしてその復興のために何が必要とされているかについて、話していただいた。また平成14年秋にユネスコのミッションでパーミヤンに行かれた前田耕作先生に、同遺跡の保存の現状について話していただくとともに、文化庁が派遣したミッションを代表して、当研究所の渡邊明義所長がその報告をした。

日時：平成15年3月13日(木) 13:00～17:30、会場：東京文化財研究所セミナー室、出席者数：74人

講演：

- 「アフガニスタンの現状報告」 東京文化財研究所 渡邊明義
- 「アフガニスタンの考古遺跡の保存の現状と今後の課題」
アフガニスタン国立考古学研究所 Abdul Wasey Ferozzi
- 「アフガニスタンの歴史的建造物の保存の現状と今後の課題」
アフガニスタン情報文化省歴史的記念物保存修復局 Abdul Ahad Abassy
- 「パーミヤン遺跡の保存の現状とその保存に向けての対策」 和光大学 前田耕作

第36回美術部オープンレクチャー 「日本における外来美術の受容」(B13-02-2/5)

美術部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座「美術部オープンレクチャー」を毎年秋に開催しているが、本年度で36回目を迎えた。昨年度は土曜日の午後を選んで3週連続で開講したが、今年度は金曜日と土曜日の午後、2日連続で開講し、聴講者の便宜を図るよう努めた。

好評だった前回に引きつづき、美術部の研究プロジェクト「日本における外来美術の受容に関する調査研究」をテーマに掲げたが、今年度はとくに、東アジア圏の仏教美術の交流史と、明治から昭和の日本とフランスの美術交流のふたつのサブ・テーマを設けた。2日間の講演の内容は以下のとおりである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開かれる「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されており、今回は昨年を上まわる214名の参加があった。

第1日：2002（平成14）年10月18日（金）午後1時30分～4時 東京文化財研究所セミナー室

井手誠之輔（情報調整室長）「異文化の模倣・増幅・拒絶 日中間における涅槃表現の流通と変容」

仏教美術史の分野では、中国美術の影響や伝播という観点から、日本における外来美術の問題が語られてきた。しかし、伝播論・影響論のもとでは、渡し手側の中国や受け手側の日本において、実際に造形をとりまいていたはずの個別具体的な事象は、看過されてしまいがちである。この発表では、中国を異文化とみなし、彼我の違いを明らかにしたうえで、日本に伝来する南宋仏画の涅槃表現が、どのように理解されたのかという問題を、異文化の模倣・増幅・拒絶という3つの観点から考えた。

須藤弘敏（弘前大学人文学部教授）「経を写す 絵を写す」

仏教発祥の地インドから最も遠い日本では、多くの僧侶が教えを求めて隋・唐・宋などに渡り、数万巻の経典をもたらした。それらの表紙には装飾文様が、見返しには経意をあらわす絵画（経絵）が描かれ、当時の人々は、あたかも連載小説の挿絵を見るような、美しく整った異国の画面に魅せられた。奈良時代から鎌倉時代には、これらをもとに写経が作られたが、その小さな画面には大陸仏教への憧れとともに、教団やパトロンの思惑などさまざまな意図もまた反映されており、仏教美術の中でも興味のつきない作品になっている。

第2日：2002（平成14）年10月19日（土）午後1時30分～4時 東京文化財研究所セミナー室

山梨絵美子（美術部広領域研究室長）「黒田清輝 日本の裸婦をどう描くか」

1884年にフランスに留学し、サロンの画家ラファエル・コランに師事して1893年に帰国した黒田清輝（1866～1924）は、19世紀末フランスの絵画を手本として日本の油彩画をつくろうとした。その中で、最も力を注いだことのひとつが、西洋の理想的人体を手本とし、解剖学的にも矛盾のない日本人の裸婦像を描くことであった。黒田はそれをどのように作り出していったのか、なぜそれを重視したのかを、代表作「智・感・情」などの黒田作品にそって考えた。

林洋子（京都造形芸術大学芸術学部助教授）「日本・藤田嗣治・フランス」

藤田嗣治（1886～1968）は1920年代のパリで、日本画の要素を油彩表現に取り入れた独特の画風で成功した。パリでは、名声とともに「日本」を象徴する存在としての制作と振る舞いが求められた藤田であるが、第二次大戦中に東京へ戻ると、逆に「フランス」的要素が求められた。このふたつの時期の作品には質的な違いが見られる。「日本人」であることをベースに制作した画家でもあった藤田は、晩年をパリに暮らし、フランス国籍を取得している。こうした日仏間での心の「ゆれ」は、藤田の芸術を考える上で見逃すことができない。

第 32 回芸能部公開学術講座「話芸と忠臣蔵」(C05-02-2/5)

日 時：2002 (平成 14) 年 12 月 19 日 (木)

場 所：江戸東京博物館ホール

入場者数：488 名

プログラム：

講演 1 「落語の技法と忠臣蔵物」 小野寺節子 (民俗芸能研究室調査員)

落語のなかには忠臣蔵に材をとったものが数多くある。忠臣蔵が、いかに庶民にまで親しまれ、その物語世界が愛好されてきたかを示す指標であるともいえる。本講演では、その代表作でもある「中村仲蔵」実演に因んで、落語の技法、上方落語と江戸落語の相違などを踏まえた上で、忠臣蔵に取材した落語の演目を広く紹介した。さらに「中村仲蔵」の構成と面白さに触れるとともに、代々の演者による演出の相違などについて触れた。

実演 落語『中村仲蔵』 柳家さん喬

講演 2 「忠臣蔵文化の拡がり」 児玉竜一 (演劇研究室研究員)

赤穂四十七士によるいわゆる<赤穂事件>は、芝居に由来する<忠臣蔵>という名で通称されるように、芸能・演劇文化と極めて密接な関係を持っている。事件後、多くの演劇・語り物・俗伝が作られ、元となった史実との見極めが難しいほどに口碑が堆積して一つの世界を形成している。本講演では、小説や映画にまでいたる忠臣蔵物を幅広く紹介するとともに、それらの大きな水源となった講談、あるいはその銘々伝に取材した歌舞伎作品の上演史などについて触れた。

実演 講談『大石内蔵助十八ヶ条申し開き』 宝井馬琴

夏期学術講座 (C05-02-2/5)

第 27 回夏期学術講座「文化財としての民俗芸能」

日 時：2002 (平成 14) 年 7 月 23 日 (火) ~ 25 日 (木)

(1) 10:30 ~ 12:30、(2) 13:15 ~ 14:45、(3) 15:00 ~ 16:30

会 場：東京文化財研究所会議室

参加者：17 名

担当講師：宮田繁幸 (民俗芸能研究室長)

俵木 悟 (民俗芸能研究室研究員)

小野寺節子 (民俗芸能研究室調査員)

テ マ：文化財としての民俗芸能

趣 旨：民俗芸能は、現在の文化財保護法の中で無形民俗文化財と位置づけられ、指定・選択等の行為を通じてその保護が図られているが、ここに至るまでの文化財保護行政の中では、その扱いにはいくつかの変遷があった。また、無形の文化財の一種である民俗芸能の保護は、建造物・美術工芸品等の有形文化財のそれと比べ、その実態が広く知られているとは言い難い状況がある。このため、民俗芸能の文化財としての位置付けの変遷を改めて検証し、あわせて現在の文化財としての保護の実態について、総合的かつ具体的に明らかにする講義を企画した。

プログラム：第 1 日 (2) 文化財保護制度の変遷と民俗芸能、(3) 文化財保護制度の変遷と民俗芸能

第 2 日 (1) 民俗芸能の文化財指定・選択、(2) 民俗芸能への補助・助成制度、(3) 地方自治体における民俗芸能保護

第 3 日 (1) 民俗芸能の記録作成、(2) ユネスコ世界無形遺産と民俗芸能、(3) 質疑

民俗芸能研究協議会 (C05-02-2/5)

第5回民俗芸能研究協議会「民俗芸能の映像記録作成」

日 時：2002（平成14）年11月21日（木） 10:30～17:30

会 場：東京文化財研究所セミナー室

参加者：102名

テーマ：民俗芸能の映像記録作成

趣 旨：芸能部では毎年テーマを定め、保存会関係者・行政担当者・研究者などが一堂に会して民俗芸能の保護と継承について研究協議する会を開催しており、本年は第5回である。民俗芸能は時代の変化にともなって変容していくという性格をもっている。したがって民俗芸能の保護を考える場合、現状の忠実な記録の作成が大きな意味を持つ。また芸能という身体の動きによる表現を記録するために、動画像を用いることは不可欠である。近年、文化財保護行政的にも民俗芸能の映像記録作成の需要はきわめて高いが、方法論的な討議がなされる機会は少ない。なかでも映像記録作成の一方の主体である映像記録作成業者や記録される側である演者の立場からの発言の機会は限られている。こうした点を考慮し、有意義な民俗芸能の映像記録作成に資するために、現場の声を聞くことが今回の協議会の目的である。

第5回民俗芸能研究協議会では、以上の点について、現在も現場で民俗芸能の映像記録作成を手がけている専門家と、最近意欲的な映像記録作成事業を行った民俗芸能保存会による4件の事例発表と、コメンテーターを交えた総合討議を実施し、その結果を報告書として刊行した。

プログラム：

10:30～10:40	挨拶 東京文化財研究所長	渡邊明義
10:40～11:25	「民俗芸能記録映像制作現場からの報告 - 箱根湯立獅子舞の事例を中心に - 」 映像演出家	細見吉夫
11:25～12:10	「映像記録における技術的側面と問題 - 岩手県における民俗芸能の記録を例に - 」 東北文化財映像研究所所長	阿部武司
12:10～13:30	(昼食)	
13:30～14:15	「鴨沢神楽記録保存事業への取り組み」 鴨沢神楽保存会	後藤公明
	江刺市教育委員会社会教育課文化係主任	千葉達也
14:15～15:00	「尾口でくまわしの映像記録作成について」 東二口文弥人形浄瑠璃保存会会長	道下甚一
	尾口村教育委員会教育課長	宮下定男
15:00～15:20	(休憩)	
15:20～17:20	総合討議 コメンテーター	
	民俗芸能学会代表	山路興造
	文化庁伝統文化課芸能部門文化財調査官	樋口和宏
	コーディネーター	
	東京文化財研究所芸能部民俗芸能研究室長	宮田繁幸
総合司会	東京文化財研究所芸能部民俗芸能研究室	俵木 悟

第 32 回文化財保存修復研究協議会 (E10-02-1/1)

目 的

この研究協議会は、保存調査手法や修復技術など保存と修復に関わる今日的テーマについて、外部に広く知ってもらうために発表および討議の場を設けてきた。保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターが交替で担当しているが、平成 14 年度は、修復技術部が担当した。

近年、欧米諸国の美術館・博物館から日本の工芸品の保存と修復に関する問い合わせが寄せられるようになり、とくに日本独自の技術で作られた漆芸品や武器武具など海外での技術では修復できない作品が多い状況である。

今回の研究協議会は、平成 11 年度に行った同研究協議会以降に判明した情報をもとに近世輸出入工芸品の保存と修復をテーマとして輸出入工芸品に関する研究の経緯、文献調査報告、海外での漆芸品の保管状況、輸出漆器の技法と表現などの研究発表を行った。

テ ー マ：近世輸出入工芸品の保存と修復

日 時：2002 (平成 14) 年 7 月 3 日 (水)

場 所：東京文化財研究所セミナー室

< 研究発表 >

琉球漆器研究の歩みを振り返る	徳川美術館	徳川 義宣
三井の長崎貿易経営史料と大阪銅座史料	三井文庫	賀川 隆行
青貝屋武衛門と輸出漆器について	神戸市立博物館	勝盛 典子
江戸時代のオランダ船輸入染織品について	鶴見大学	石田 千尋
北欧に伝わった日本の蒔絵	京都国立博物館	永島 明子
輸出様式とその周辺 在デンマーク日本漆器調査報告	文化庁	山崎 剛
輸出漆器の技法について	東京文化財研究所	加藤 寛
アシュモリアン美術館蔵「風景蒔絵ナイフボックス」の保存と修復	漆芸修復家	勝又 智志
輸出漆器の保存と技法について	漆芸修復家	山下 好彦
ハンブルク工芸美術館「蓬莱蒔絵手箱」の保存と修復	漆芸修復家	松本 達弥

・バイエルン国立民族博物館蔵「源氏蒔絵螺鈿化粧箱」の実見会について

今回の研究協議会にあわせて、在外日本古美術品保存修復協力事業で修復中の「源氏蒔絵螺鈿化粧箱」の実見会を行った。この漆器は、1630 年にオランダへ向けて輸出された作品で、徳川美術館所蔵の国宝「初音調度」と同時代に製作された漆器である。各面に李朝唐草のボーダーとカトゥーシェとよぶ花先形の枠の間に梨地を作り、枠内に高蒔絵で源氏絵あるいは風景を表わした精緻な作品である。この箱とほぼ同じ作品がヴェルサイユ宮殿に保管されていることが確認され、当初は女性用の携帯トイレとして製作されたことが実見会の調査から判明した。

< 報告書 > 1 件

『第 32 回文化財保存修復研究協議会 近世輸出入工芸品の保存と修復』 03.1

近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 (E01-02-2/5 の一部として実施)

平成 14 年度は、鉄道車両および鉄道施設の保存と活用に関する研究会を行った。今年度は、計 3 回の研究会を開催し、鉄道車両および鉄道施設の保存に関する我が国の現状および問題点の報告、ドイツ・イギリスなど海外における同種の問題やその解決方法に関する報告を受け、議論を行った。

第9回「鉄道車両及び施設の保存修復 動態保存を中心に」

日 時：平成14(2002)年7月1日(月) 13:30~17:30

会 場：東京文化財研究所地階セミナー室

講演者：富坂 賢(文化庁)「近代の科学・産業遺産の保存と活用」

笹田昌宏(ふるさと鉄道保存協会)「鉄道文化財に果たせるボランティアの役割」

杉本一正(梅小路蒸気機関車館)・亀田勝徳(西日本旅客鉄道(株)梅小路運転区)

「蒸気機関車の保存について」

森井順之(東京文化財研究所)「イギリス・ドイツにおける鉄道および鉄道施設の保存の現状について」

第10回「欧米における鉄道車両及び鉄道施設の保存修復」

日 時：平成14(2002)年11月7日(木) 9:30~16:30

会 場：東京文化財研究所地階セミナー室

講演者：富坂 賢(文化庁)「日本の近代科学技術・産業遺産の保存と管理」

川野邊渉(東京文化財研究所)「鉄道車両の修復とその保存・活用」

平野直樹(交通博物館)「鉄道文化財の保存について」

リチャード・ギボン(イギリス・国立鉄道博物館)「鉄道車両の修復」

ヘレン・アシュビイ(イギリス・国立鉄道博物館)「ヴィクトリア女王のサロンカー」

アルフレッド・ゴットヴァルド(ドイツ技術博物館)

「ベルリン交通技術博物館(現・ドイツ技術博物館)における鉄道遺産の修復とその哲学」

ヨアヒム・プロイニンガー(ドイツ鉄道博物館)

「ボランティアと専門家 プロシアT3機関車の修復」

トーマス・トロザック(アメリカ・保存修復専門家)「物証の発見 - ホロコースト鉄道車両の修復 - 」

第11回「鉄道車両及び鉄道施設の保存修復について2」

日 時：平成15(2003)年2月19日(水) 13:30~17:00

会 場：東京文化財研究所地階セミナー室

講演者：須藤洋右(カヤ興産株式会社)「加悦SL広場の運営について」

白井 昭(大井川鐵道株式会社)「大井川鉄道における鉄道文化財保存の経過と問題点」

佐藤卓司(小樽交通記念館)「野外博物館の車両保存の現状・課題」

在外日本古美術品調査研究会(E05-02-2/5 の一部として実施)

修復技術部では、在外日本古美術品保存修復技術協力事業で海外から修復のために里帰りをした工芸品に関して調査・研究を行っている。平成14年7月3日(水)に、バイエルン国立民族博物館所蔵の「源氏蒔絵化粧箱」を対象に技法ならびに蒔絵表現についての検討会を開催した。その結果、1639年に製作された同作品には徳川美術館蔵「初音調度」(1637年)に見られる、梨地・葦手・切金などを併用した肉合研出蒔絵と同様な手法で装飾されていることが判明した。また、9月25日には大英博物館からフランク・ミニー氏を招へいし、同博物館が所蔵する漆器の保管・修復に関する講演を行った。

日 時：平成14年9月25日(水) 14:00~16:00

会 場：東京文化財研究所地階セミナー室

講演者：フランク・ミニー(大英博物館)「大英博物館での文化財の保管と修復」

渡邊博之(漆芸作家)「日本原産種生漆の基本的漆芸技術との関係」



修復作業中のミニー氏



修復後の高麗螺鈿小箱

総合研究会（ A ）

所内で開催する総合研究会は、協力調整官 情報調整室が担当する。各研究部・センターの研究員がテーマを設定してプロジェクトの成果を研究発表し、テーマに関して所内の研究者間で自由討論するシンポジウム形式をとっている。平成 14 年度は、以下のスケジュールで実施した。

第 1 回 平成 14（2002）年 7 月 16 日（火） 東京文化財研究所セミナー室

発表者：井手誠之輔（情報調整室）「大徳寺伝来五百羅漢図を考える」

司 会：塩谷 純（情報調整室）

第 2 回 平成 14（2002）年 10 月 1 日（火） 東京文化財研究所セミナー室

発表者：高桑いづみ（芸能部）「プロジェクト・秀吉のみた能」

司 会：児玉 竜一（芸能部）

第 3 回 平成 14（2002）年 11 月 5 日（火） 東京文化財研究所セミナー室

発表者：中野 照男（美術部）「クムトラ第 79 窟の壁画の構成とその問題」

勝木言一郎（美術部）「中国壁画の構造、材料、技法をめぐって」

司 会：中野 照男（美術部）

第 4 回 平成 14（2002）年 12 月 3 日（火） 東京文化財研究所セミナー室

発表者：平尾良光（保存科学部）「文化と鉛」

司 会：三浦定俊（保存科学部）

第 5 回 平成 15（2003）年 1 月 7 日（火） 東京文化財研究所セミナー室

発表者：西浦忠輝（国際文化財保存修復協力センター）

「東南アジアの遺跡の保存 - タイ・カンボジアとの国際共同研究」

司 会：斎藤英俊（国際文化財保存修復協力センター）

第 6 回 平成 15（2003）年 3 月 4 日（火） 東京文化財研究所セミナー室

発表者：早川典子（修復技術部）「伝統的な接着材料について - 糊・膠・布海苔など - 」

司 会：青木繁夫（修復技術部）

【退官記念講演会】 平成 15 年 3 月 18 日（火） 東京文化財研究所セミナー室

発表者：平尾良光（保存科学部）「鉛を通して見た世界」

司 会：三浦 定俊（保存科学部）

美術部研究会（ B ）

美術部ではほぼ月に1度のペースで美術史研究者による研究会を開催し、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、また問題を提起して議論している。平成14年度は下記のような研究会が行われた。また、12月4～6日に行われた第26回文化財の保存・修復に関する国際研究集会「うごくモノ - 時間・空間・コンテクスト」に関連して、その内容についての議論を行った。

- 5月8日 松木 寛（東京都美術館）「伝周文屏風（大和文華館本と前田育徳会本）について」
- 6月26日 塩谷 純（情報調整室）「ウィーン美術史美術館所蔵の画帖について」
- 7月24日 「異文化受容と美術」第3回ミニシンポジウム「図像の受容とそのゆくえ 中国・朝鮮と日本の仏教美術」
- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 浄土図の受容 | 勝木 言一郎（美術部） |
| 日本における阿修羅像の図像の受容について | 水野 さや（日本学術振興会特別研究員） |
| 白衣観音の行方 | 津田 徹英（美術部） |
| 中世の仏伝図と東アジア | 中野 照男（美術部） |
| ディスカッション | 司会 岡田 健（国際文化財保存修復協力センター） |
- 10月30日 綿田 稔（美術部）「雪舟系花鳥図屏風について」
- 3月19日 山梨絵美子（美術部）「クンストカーメラ所蔵フィッセル・コレクションの日本絵画」

国際シンポジウム「うごくモノ - 時間・空間・コンテクスト」についての研究会（平成14年度）

- 第1回 4月10日 各セッションの構成とその名称について
- 第2回 4月19日 各セッションの趣旨と構成について
- 第3回 5月9日 各セッションの趣旨と構成について
- 第4～10回 8月20日、10月2日、4日、9日、10日、16日 チラシとプレプリントの内容について
- 第11回 11月6日 各セッションの進捗状況と問題点
- 第12回 11月27日 各セッション趣旨説明原稿の発表（勝木言一郎・塩谷純・津田徹英）国内発表者を交えてのディスカッション
- 第13回 11月29日 各セッション趣旨および発表内容と議論の方向性について
- 第14回 12月3日 各発表者とセッション担当者間での内容確認
- 第15回 3月26日 内容の反省と今後の問題
- 藤原貞朗（茨城大学）「国際シンポジウム『うごくモノ - 時間・空間・コンテクスト』を振り返って」
- 国内発表者を交えてのディスカッション

保存科学部研究会（ D ）

（1）平成14（2002）年11月20日「IPMによる最近の取り組みと温度処理による文化財害虫の殺虫について」

（東京文化財研究所会議室、参加者50名）

IPMのためのフレームワーク 博物館等の虫害管理のためのシステムティックなアプローチ

トム・ストラング（カナダ保存研究所）

文化財害虫の温度処理によるコントロール：原理と世界における実践例

トム・ストラング（カナダ保存研究所）

加温空気による大型民族学資料の殺虫処理の試み：国立民族学博物館所蔵のインド、テッパ船の事例から

園田直子（国立民族学博物館）

(2) 平成 15 (2003) 年 3 月 10 日「カビ/モニタリングの目的と限界」

(東京文化財研究所国際研修室、参加者 14 名)

「生物による汚染」を測る 手法と評価の現状

岩田 利枝(東海大学)・篠原 史彦(東海大学)・小鷲 悠(東海大学)

燻蒸業者等によるモニタリングの現状と将来の展開

中嶋 欣二(群馬県立歴史博物館)・高木 敬子(香川県立歴史博物館)・原田 和彦(真田宝物館)・

竹中 康彦(和歌山県立博物館)・及川 規(東北歴史博物館)・青木 司(千葉県立大根博物館)

(3) 平成 15 (2003) 年 3 月 13 日

「文化財の保存(収蔵展示)環境の研究 文化財施設の温湿度環境と建材の調湿性」

(東京文化財研究所会議室、参加者 34 名)

川越市山車収蔵施設及び、長浜市曳山博物館の環境調査

石崎武志(保存科学部)

調湿建材を施工した博物館等文化施設の湿気環境

宮野秋彦(名古屋工業大学名誉教授)

調湿建材の吸放湿性能試験方法 JIS とその評価

黒木勝一(財団法人建材試験センター)

大阪市住まいのミュージアムの事例

明珍健二(大阪市立住まいのミュージアム)

熊本市立熊本博物館の事例

石原健矩(熊本市立熊本博物館)

各国の文化財保護制度に関する研究会 (F)

各国の文化財保護は、国ごとに構築された保護の制度に基づいて進められている。国際文化財保存修復協力センターでは、東京文化財研究所が国際協力による文化財保存活動を進めていく上での情報を収集するために、また関係する諸機関、団体の活動に役立てていただくために、世界各国の文化財保護制度に関する調査研究をすすめている。これは、各国の文化財保護制度を、文化財保護のための法律、その特徴、法律が成り立った歴史的経緯と文化的背景、文化財そのものの内容と特質、制度を実際に運営していく機構・組織とその機能など、広範な視点から比較研究し、同時に各国の関係機関と情報の交換をはかって双方の文化財保護制度についての認識を深め、今後の国際協力活動のための基盤を築いていこうとするものである。本研究会は定期的のものではないが、科学研究費補助金等各種招へい事業によって東京文化財研究所を訪れた各国の専門家をお願いし、また国内の専門家にもお願いし、各国の文化財についてさまざまな角度からお話しいただくことを目的に開催している。

第 3 回各国の文化財保護制度に関する研究会

ドイツ・ルール地方は石炭や製鉄で繁栄したが、エネルギー源の石油や原子力への転換、情報化社会の到来とともに、ルール地方の経済は衰退し、高い失業率や環境汚染などをかかえていた。そのルール地方において、1989 年から 99 年にかけて実施された「IBA エムシャーパーク・プロジェクト」は、放置されていた産業施設を地域のアイデンティティと認識し、それらの施設の再利用をはかりながら、失われた自然環境を回復し、かつ、地域の雇用を創出することを目的としたもので、約 100 件のプロジェクトが実施され、その目的は見事に達成され、現在では、地域経済は活性化し、産業遺産の利用や見学でこの地域を訪れる人々は年間数百万人にものぼっている。

多くの成功例の中でも特に評価の高いワルトロップの炭鉱施設、エッセンの関税同盟炭鉱第 12 豎坑施設、デュイスブルグ・ノルト景観公園(旧製鉄所施設)のプロジェクトに重要な役割を果たしたドイツの建築家、保存専門家 3 人を招待して研究会を開催した。

テーマ：ドイツの産業遺産の保存と活 現代社会に適合した歴史的建造物の多様な再利用

主催：東京文化財研究所(国際文化財保存修復協力センター)

日時：2002(平成 14)年 7 月 11 日(木) 10:30~17:50

会場：東京文化財研究所セミナー室

講演：

- 「ドイツの産業遺産の保存と活用 IBA エムシャーパーク・プロジェクト」 東京文化財研究所 斎藤英俊
 「ワルトロップ炭坑の転用と活用」 建築家 クラウス・ディーター・ルックマン
 「関税同盟炭坑第 12 堅坑における修理・活用とデザイン」 建築家 ハンス・クラベル
 「デュイスブルグノルト景観公園 製鉄所からランドスケープパークへ」
 ドイツ産業文化協会 マイケル・クラーク

総合討議

パネラー：クラウス・ディーター・ルックマン、ハンス・クラベル、マイケル・クラーク、司会：斎藤 英俊

第 4 回各国の文化財保護制度に関する研究会

テーマ：文化財への地理情報システム応用に関する研究

日時：2003（平成 15）年 1 月 22 日（水）13:00～17:30

会場：東京文化財研究所会議室

- 「『中国文物地図集・陝西分冊』マルチメディア情報処理システムについて」西安文物保護修復センター 張在明
 「陝西省における城址分布の研究」 西安文物保護修復センター 范培松
 「GIS 地理情報システムの文化財分野への応用」 東京文化財研究所 二神葉子

第 5 回各国の文化財保護制度に関する研究会

ドイツでは、連邦全体で 90 万棟にも及ぶ歴史的建造物を文化遺産として保存している。これらの膨大な遺産は、ドイツ社会にとって都市の再開発や経済の発展を阻害するものなのであるのか？それとも有用な文化的財産となっているのであるのか？

この研究会で紹介された様々な歴史的建造物の再生事例から、文化遺産の大胆な活用と用途の多様さを知ることができ、さらに、コンセプトの明確さ、デザインとしての質の高さが追求されていることが理解された。また、多くの困難な条件に 대응することができる才能豊かで経験豊富な建築家の存在も指摘することができる。参加者と共に日本の現状と比較しながら活発な議論が行われた。

テーマ：ドイツの歴史的建造物の再生 現代社会に適合した歴史的建造物の多様な再利用

主催：東京文化財研究所（国際文化財保存修復協力センター）

日時：2003（平成 15）年 2 月 13 日（木）13:30～17:50

会場：東京文化財研究所セミナー室

講演：

- 「ドイツにおける歴史的建造物の再生： ベルリンの 3 つの事例 」 東京文化財研究所 斎藤英俊
 「ドイツにおける歴史的建造物の再生： 駅舎、市電車庫、屠場の活用 」
 文化財建造物保存技術協会 木村勉
 「ベルリンとその郊外の産業建築物の転用について 歴史的建造物の発展的可能性 」
 建築家 クラウス・アンデルハルテン

討議：「歴史的建造物の保存と再生：日本とドイツ」

パネラー：クラウス・アンデルハルテン、クリストフ・ヘンリヒセン（ヘッセン州文化財保存局）
 澤田誠二（滋賀県立大学） 近藤光雄（財団法人文化財建造物保存技術協会） 司会：斎藤英俊

第 6 回各国の文化財保護制度に関する研究会

テーマ：イギリスの新しい文化財保護の動き ロンドンの都市景観保存から町並み再生事業まで

日時：2003（平成 15）年 3 月 10 日（月）13:30～17:30

会場：東京文化財研究所 会議室

- 「スコットランドの文化財保存 ヒストリック・スコットランドの仕事」
 ヒストリック・スコットランド イングバル・マクスウェル

「イングランドの文化財保存 イングリッシュ・ヘリティジの現在」

イングリッシュ・ヘリティジ ジョフリー・ノーブル

「イングランドの保存地区及び文化財建造物の保存の現状と課題」

イングリッシュ・ヘリティジ チャールズ・ワグナー

総合討議

アフガニスタン等文化遺産保存修復専門家会議（ F ）

アフガニスタンでは、2002年6月にカルザイ暫定政権議長を大統領とする移行政権が成立し、20年以上に及んだ他国の介入や内乱による混乱が収束した。アフガニスタンの戦後復興における文化遺産分野での日本の援助については、文化庁は、同年9月有識者からなる「アフガニスタン等文化財国際協力会議」を発足させて総合的な基本方針について検討を開始し、その一環として東京文化財研究所に委託して現地に調査団を派遣するなどの事業を行っている（受託研究「アフガニスタン文化財保存修復協力事業」、**頁参照）。

アフガニスタン等文化遺産保存修復専門家会議は、これに並行して東京文化財研究所が文化庁との連携のもとで開催しているもので、アフガニスタンおよび関係する文化財の保存修復に知見のある国内の専門家を招き、日本が行う協力事業のより効果的な実施に向けて、専門家の意見交換、情報収集、ネットワーク構築を目指し、2002（平成14）年度中に2回の会議を開催した。第1回は1月8日、前田耕作和光大学教授を講師に招き、パーミヤン石窟の保存修復について意見交換を行った。第2回は3月14日、東京文化財研究所が招へい中のアフガニスタン人専門家2名を講師に招き意見交換を行った（国立考古学研究所長Abdul Wasey Feroozi氏・歴史的記念物保存修復局長Abdul Ahad Abassy氏）。アフガニスタン側が必要としている援助について活発な質疑応答が行われ、今後の協力を進める上で有効な情報を得ることができた。

第1回アフガニスタン等文化遺産保存修復専門家会議

日 時：2003年（平成15）年1月8日 10:30～16:30

出席者数：19名

第2回アフガニスタン等文化遺産保存修復専門家会議

日 時：2003年（平成15）年3月14日 10:30～17:00

出席者数：21名

会場は第1回、2回とも東京文化財研究所会議室



第2回専門家会議